

第2表 梅雨前線による過去の豪雨被害との比較

年 月 日	死者	傷者	行方不明	家屋全壊	家屋半壊	流出	浸水 (床上)	被害地域
昭9.7月9～7月12日	119	370	26	157		582	—	北陸
昭10.6月27～6月30日	147	283	9	449	1204	328	862	西日本各地(福岡, 京都)
昭13.6月28～7月5日	708	3393	217	2905	4465	1753	186974	本州中部(神戸)
昭16.7月11～7月12日	87		15	252		252	40507	静岡, 神奈川, 島根
昭26.7月7～7月17日	162	358	144	411	727	219	103298	西日本各地(京都, 山口, 鹿児島)
昭27.7月7～7月18日	67	101	73	591	—	—	—	西日本各地(大阪, 和歌山, 広島)
昭28.6月24～6月29日	749	2720	265	3231	11671	2468	3154643	北九州・中国
昭28.7月16～7月23日	670	5739	389	3268	1796	4055	16698	和歌山, 奈良
昭36.6月24～7月7日	270	1251	82	1067	1404	651	72003	全国(神戸, 天竜川流域)

ては山間の狭隘部に約300mmの豪雨が集中したので天竜川が飯田付近で氾濫したのと連日の雨により地盤がゆるみ山くづれがおき、多数の人命、家屋の埋没がおこり死者は全国の34%、行方不明者60%、負傷者81%、倒壊家屋51%の悲惨な結果となった。

5. 災害の特徴

今回の災害の特徴としては次のようなことが考えられている。

(1) 山くづれと崖くづれ

約8,000個所の報告があった。連日の雨で地盤がゆるんでいる所に集中豪雨があったため、山(崖)くづれが発生しこれによる死者、負傷者が目立った。特に長野県下伊那郡大鹿村と上伊那郡中川村は一村全滅の悲運にあり、又神戸では山の斜面に無理な住宅地を造成し崩壊している。したがってこのため宅地造成の規制に関する立法措置が検討される機運を作る起因となった。

(2) 小河川の決壊と溢水

流水力の少ない小河川が溢水又は決壊する事例が多か

った。特に神戸市内および阪神間の各河川では水路が短かく且つ急流であるため、一斉に増水し低地の道路および宅地に流れ込んだ。

(3) 低地の排水不良による被害の発生

海拔0m地帯の伊勢湾に面する地域、又東京湾に面する低地では排水ポンプの排水能力以上に増水したため、排が間にあわず浸水地域が拡大した。

(4) 農村に与えた被害

丁度農村は田植期にあたり、水田の水路を一杯に利用しており、そこに濁流が一気に浸入したため全滅した所もあり、又野菜等は最盛期であったため被害は相当大きいものと予想される。

引用文献

昭和36年梅雨前線豪雨報告(昭36.7.11) 気象庁
 昭和36年梅雨前線豪雨(昭36.7) 気象協会
 昭和36年梅雨による被害発生状況とこれに対する警察措置について(昭36.7.7) 警察庁警備局

北東の風

根本 順吉

コーエンとドラブキンの編纂した『ギリシア科学の原典叢書』(1958. Harvard)には、気象に関したものととして、アリストテレスとテオフラトスからの抜粋がのっている。アリストテレスの方は、ロエブの古典叢書にも収録されているので、容易によむことができるが、ここに引用されているテオフラトスの『天気の兆候としての風』は、自分には始めてなので興味深くよんだ。要するに色々な風向に従って、異った天気のもたらされることを例示したのだが、場所と季節とを限定すれば風向は気団にも翻訳できるので、この中には近代気象学に

通ずる観察も少なくないのである。『どの風向の風にもまして、空全体を厚い雲でおおってしまう風は北東および南西の風であり、特に北東の風の場合はこれが著しい、他の風向の場合は雲をしりぞけてしまうのだが、北東風の場合のみは逆に雲をひきつけるのである』というのが北東風の説明である。

近頃、病気と気象との関係を調べていて、北東風の場合が発病や発作に都合のよい一つの重要な型であることがわかってきたが、テオフラトスによると、ギリシアでも北東風の天気は、どうやら日本と同じようだから、日本、台湾で実証されたことを、次にはギリシアの舞台でためしてみたい、というのが現在の私の夢である。